様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６３７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０３８５９

研究課題名（和文）国際労働運動の発展過程－オーラルヒストリーによる労働運動の戦後史研究の再構築

研究課題名（英文）Study of the Development Process of the International Labor Movement : Rebuilding of the postwar history study by the oral history

研究代表者
田口　和雄（TAGUCHI, Kazuo）

高千穂大学・経営学部・教授

研究者番号：７０４０７６５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1960～80年代に従事した労働運動に携わった労働実務者等へのオーラルヒストリー調査を行い、当時の労働運動の実態について当事者の視点に立った証言記録を収集した。第1に、本研究協力機関の支援を受けて、新規のオーラルヒストリー調査を労働実務者３人に対して、１人４回程度実施し、調査から得た証言記録を報告書にとりまとめた。第2に研究活動の中で得られた戦間期の個別企業の人事マイクロデータ（従業員の人事評価表）を用いた計量分析により、研究論文を取りまとめ発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果は、第１に既存研究の限界であった、実際の人事評価プロセスの構造、賃金等の処遇への反映状況を人事マイクロデータにより明らかにし、戦間期の人事処遇の実態状況に関する労働史研究の基盤の拡充に貢献すること、第２に当時起きた様々な事象について、当事者の視点から事象について語ってもらうことにより、既存の研究成果等ではうかがいしれない事実ならびに当事者としての考え・意見などをオーラルヒストリー調査により明らかにし、労働史研究の研究基盤の拡充に貢献することができた。

研究成果の概要（英文）：This study conducted an oral history survey of labor practitioners involved in the labor movement from the 1960s to the 1980s, and collected testimony records from the perspective of the parties concerned regarding the actual state of the labor movement at that time. First, with the support of research organization, I conducted for three labor practitioners about four times per person by a new oral history survey, and compiled a report of the testimony records obtained from the new investigation. Second, I wrote research papers by quantitative analysis using personnel microdata of individual companies during the interwar period obtained from research activities.

研究分野：労働史

キーワード：労働史　オーラルヒストリー　労働運動　人事労務管理

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

労働運動史研究は、実態調査や文書史料の蓄積によって発展してきた。しかし現在、労働運動史研究における史料は、一般公開が困難で、なおかつ史料自体の破棄が起こっている。

文書史料の不足を補い、さらに新しい研究テーマを得るためにも、オーラルヒストリー・メソッドが注目を浴びている。この手法は、御厨（2002）『オーラルヒストリー』等で紹介されたように、政治史や社会史の分野で発展してきた。オーラルヒストリーは、第１に公式文書には現れない複数のアクターによる集合的意思決定プロセスや交渉プロセスを扱う政治史の利用方法は、労使関係分野においては労使関係の交渉プロセス分析や労働運動に向けた労働組合の組織内意思決定プロセス分析に優れているし、第２に階級文化や組織文化を扱う社会史の利用方法は労働者文化の分析に適していることが、その主たる理由である。

研究代表者は、労働分野の実務担当者（以下「労働実務者」）のオーラルヒストリー調査を手がける一方、積極的にオーラルヒストリー史料群を使って戦後史研究の研究論文を作成してきた。

２．研究の目的

本研究の目的は、オーラルヒストリー・メソッドによる 1960～80 年代に従事した労働組合の国際労働運動に携わった専従者（以下「国際労働運動実務者」）の証言記録、ならびに非公式一次資料（以下「オーラルヒストリー史料群」）の整備・拡充を図り、労働運動の戦後史研究（以下「労働運動史研究」）を多面的・複合的に行い、その研究蓄積を促進することである。具体的には、以下に示している３つである。

①外部機関と連携したオーラルヒストリー調査に向けた国際労働運動実務者のネットワーク形成

②国際労働運動実務者へのオーラルヒストリー調査の実施と証言記録、ならびに個人が所有している非公式一次資料群の収集

③国際労働運動実務者から提供された非公式一次史料群のアーカイブ化

３．研究の方法

（１）概要

研究方法として、本研究は主にオーラルヒストリー調査を用いた。しかし、オーラルヒストリー調査の計画・実施・発表に時間を要するため、タイムリーにオーラルヒストリー史料群の利用可能な環境整備が困難であることが想定される。そこで、本研究は最終年度にオーラルヒストリー史料群の整備を完成させるのではなく、既存オーラルヒストリー史料群を使って、初年度から発表する一方、本研究による調査の準備を同時並行で進めた。

具体的方法には、つぎの 3 つのステップを連動させ、オーラルヒストリー史料群を利用したい労働研究者、企業の人事担当者、労働組合関係者等の支援を目指した。

【ステップ①】既存のオーラルヒストリー史料群による研究報告、新調査計画の実施

【ステップ②】新調査の実施と調査協力者から提供された非公式資料群のアーカイブ化

【ステップ③】新調査による史料群の研究報告

（２）既存のオーラルヒストリー史料群による研究報告、新調査計画の実施【ステップ①】

現在、継続している各種研究会を発展させ、オーラルヒストリー史料群を使った研究報告を行った。既存のオーラルヒストリー史料群を利用できるので、1 年目から論文作成に取り組む一方、未調査の整理と新調査の実施によって徐々に拡大した。なお、新調査の計画には１つの困難があった。研究会を通じて、いかにオーラルヒストリー調査協力者を確保するかである。その理由は、調査対象者となる労働分野の実務担当者の協力があって初めてオーラルヒストリー調査が成り立つからである。そこで、本研究は公益財団法人・日本生産性本部労働研究センター（以下「本研究協力機関」）の支援を受け、研究会の運営への協力、ならびにオーラルヒストリー調査に協力を得られる労働実務者のリストを作成した。

（３）新調査の実施と調査協力者から提供された非公式資料群のアーカイブ化【ステップ②】

ステップ①の新調査計画に基づいて新調査を適宜、実施した。さらに、新調査にて調査協力者から個人の手記や史料等の非公式一次史料群の提供を受けた場合には、アーカイブ化を進め、オーラルヒストリー史料群の蓄積を図るとともに、その研究報告を行った。

（４）新調査による史料群の研究報告【ステップ③】

科研期間で得られたオーラルヒストリー史料群に基づく研究論文の作成等を行った。また、本研究協力機関と連携しながら、科研期間終了後もオーラルヒストリー史料群を利用したい労働研究者、企業の人事担当者、労働組合関係者等の支援を行った。

また、本研究協力機関と連携しながら、科研期間終了後もオーラルヒストリー史料群を利用し

たい労働研究者、企業の人事担当者、労働組合関係者等の支援を行い、研究成果の普及促進を継続していくことにより、オーラルヒストリー史料群の利用可能な環境の整備および今後のオーラルヒストリー調査を計画するためのネットワークの継続と拡大を推進した。

４．研究成果

（1）報告書の発行

本研究では、労働分野で活躍した組合リーダーなどの労働エリートを支援した労働実務者オーラルヒストリー調査を実施し、報告書を刊行した。その内訳は以下の通りである。

- 『三浦義オーラル･ヒストリー（元日本商業労働組合連合会国際局局長）』科研費報告書、2017年10月
- 『桝本純オーラル･ヒストリー（元同盟調査局・元連合総合生活開発研究所副所長）』科研費報告書、2021年１月
- 『浅澤誠夫オーラル･ヒストリー（元石川島播磨重工業㈱常務取締役）』科研費報告書、2021年９月

労働運動の戦後史研究における既存のオーラルヒストリー調査は、国内の労働運動や労使関係の事象で中心的な役割を担った労働リーダーを主な対象としていた。そのため、労働運動史の研究テーマがそうした事象に当事者がどのように関与していたかに集中する傾向にある。しかし、事象そのものは労働リーダーだけで完結するのではなく、彼ら（彼女ら）を支える労働運動実務家も関わっている。また、労働運動は国内だけではなく、国際労働運動も展開している。こうした事象を丁寧に検証するには、労働リーダーだけではなく労働運動家がどのように関わったのか、国際労働運動において彼ら（彼女ら）がどのような活動をしていたのかについても対象とすることで、戦後労働史の研究を多面的・複合的に行うことが可能となる。

上記の研究成果は当時起きた様々な事象について、当事者の視点から事象について語ってもらうことにより、既存の研究成果等ではうかがいしれない事実ならびに当事者としての考え・意見などを明らかにすることができた。例えば、三浦氏は産別組織の国際労働運動の実態について、桝本氏は連合結成前後の動きについて、浅澤氏は鉄鋼メーカーの労務担当として合併と経営の立て直しを繰り返した企業側の事情について、それぞれオーラルヒストリー調査により明らかにすることができ、労働分野の戦後史研究の研究基盤の拡充に貢献することができた。

（２）研究論文の発表

本研究では、新調査を通じて収集した史料群をもとに研究論文を発表した。その内訳は以下の通りである。

- 田口和雄・大島久幸「戦間期におけるホワイトカラーの給与統制と賃金管理」高千穂大学高千穂学会『高千穂論叢』第54巻第2号、2019年11月
- 田口和雄・大島久幸「戦間期における職員の人事評価プロセス構造～M社を題材に」高千穂大学高千穂学会『高千穂論叢』第55巻第1･2･3号合併号、2020年11月
- 梅崎修・田口和雄「労働史・史料の旅（1）－大牟田・荒尾の事例－」法政大学キャリアデザイン学会『生涯学習とキャリアデザイン』第18巻第2号、2021年3月
- 永戸哲也・大島久幸・田口和雄「戦間期における職員の評価と給与～食品製造企業N社を題材に」高千穂大学高千穂学会『高千穂論叢』第56巻第3号、2021年11月

食品製造企業から入手した戦間期における同社の人事評価の個票史料（以下「人事マイクロデータ」）をもとに、当時（戦間期）のホワイトカラーの人事評価はどのように運用され、評価結果に基づいて決める賃金（昇給）の状況を明らかにした。人事評価に関する先行研究は多く蓄積されている。その中で企業のマイクロデータを用いた代表的な研究成果として梅崎・中嶋・松繁（2003、2005）と上原（2003、2007a、2007b）が、上記の研究成果の対象時期としている戦間期の代表的な研究成果として藤村（2012）、川村（2017）、杉山（2017、2019）がある。これら既存研究は、マイクロデータをもとに従業員の賃金の決定構造を明らかにしている。

しかし、これら既存研究は人事評価結果を配置、能力開発、昇進、給与などの決定にどう反映されているが、実際の人事評価プロセス構造が明らかにされていない。また、人事評価は賃金のほかに、配置、能力開発、昇進などの処遇の決定に活用され、従業員に大きな影響を及ぼすので、彼ら（彼女ら）から重要な関心が持たれる。賃金は高くする（上げる、以下「昇給」）には、仕事の成果を出して、それが高い人事評価となることが重要であるが、人事評価といっても、その評価項目が多く設けられている。もちろん、すべても評価項目が高いことが昇給につながるものの、その中のどの評価項目が強く結びついているかの分析は進んでいない。個別企業のマイクロデータは企業秘密であり外部には原則、公開されておらず入手が極めて困難であることがその背景にある。

上記研究成果は個別企業の人事マイクロデータをもとに、実際の人事評価プロセスの構造（人

事評価の仕組みと手続き）、賃金等の処遇への反映状況を明らかにし、戦間期の人事処遇の実態状況に関する労働史研究の基盤の拡充に貢献することができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 田口和雄・大島久幸	４．巻 55-1･2･3
２．論文標題 戦間期における職員の人事評価プロセス構造～M社を題材に	５．発行年 2020年
３．雑誌名 高千穂論叢	６．最初と最後の頁 1-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 梅崎修・田口和雄	４．巻 18-2
２．論文標題 労働史・史料への旅（１）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 生涯学習とキャリアデザイン	６．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 田口和雄・大島久幸	４．巻 第54巻第2号
２．論文標題 戦間期におけるホワイトカラーの給与統制と賃金管理	５．発行年 2019年
３．雑誌名 高千穂論叢	６．最初と最後の頁 99-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 永戸哲也・大島久幸・田口和雄	４．巻 第56巻第3号
２．論文標題 戦間期における職員の評価と給与～食品製造企業N社を題材に	５．発行年 2021年
３．雑誌名 高千穂論叢	６．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計3件

1．著者名 三浦義・岩崎馨・田口和雄	4．発行年 2017年
2．出版社 科研費報告書	5．総ページ数 155
3．書名 三浦義オーラル･ヒストリー（元日本商業労働組合連合会国際局局長）	

1．著者名 桝本純・岩崎馨・小島茂・田口和雄	4．発行年 2021年
2．出版社 科研費報告書	5．総ページ数 177
3．書名 桝本純オーラル･ヒストリー（元同盟調査局・元連合総合生活開発研究所副所長）	

1．著者名 浅澤誠夫・岩崎馨・西澤昇治郎・田口和雄	4．発行年 2021年
2．出版社 科研費報告書	5．総ページ数 114
3．書名 浅澤誠夫オーラル･ヒストリー（元石川島播磨重工業㈱常務取締役）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関